

# クリステイアーネ・ヴルピウス覚書

——ゲーテとの出会いまで——

西山力也

はじめに

ゲーテ生誕二五〇周年から早や四年が過ぎた。<sup>(1)</sup> 本年私は三年ぶりにヴアイマルを訪れ、八月二十八日開催のゲーテ生誕二五四周年祭に参加した。そのさい、市内を見てまわり、また書店に入って啞然としたのは、ゲーテの商品化という現実であった。歩行者天国、シラー通りの真ん中に置かれた大きなゲーテ像。それが、両替所や土産物屋の入っている建物ヴアイマルハウスの入り口を指さして、観光客の案内役を勤めている。店頭に並べられた無数のゲーテ・グッズ。まあ、いまの世の中、これくらいは目くじらを立てるほどのことでもない、いいでしょう。だが、書店にはゲーテ関係の著作が山積みになれ、なかには眉を顰めずにはいられないものも少なくない。たしかに、生誕二五〇周年を機に、従来とは違った語り口でゲーテを論ずる著作が相次いでいたのだが、どう見ても趣味が悪く、早くも行き過ぎ、俗悪化の弊害が痛感されたのである。

長い間、「詩聖 (Dichterst) 」だの「オリュンポス神 (Olympier) 」だのと崇められてきたゲーテ。むろん、彼と私たちの間にあって鬱蒼と繁茂し、彼の本当の姿を見えなくしている神話の森は、ぜひとも伐採されなければならない。ゲーテの脱神話化は今日的ゲーテ研究の重要な課題なのである。だが、その目的は、正確な人間理解にもとづくゲーテ総体の再評価であって、眉唾物、<sup>(2)</sup> 際物<sup>キツチ</sup>で興味本位に扱うことではない。

こうした中で、とりわけジークリット・ダム<sup>(3)</sup>の著作は例外的存在であり、発売以来、異例のベストセラーとなった『クリステイアーネとゲーテ——ひとつの調査』(以下『クリステイアーネ』と略)は、相変わらず根強い人気を保っている。<sup>(2)</sup> 旧東ドイツ出身の女性作家ダムは、レンツの伝記やゲーテの妹コルネリアを扱った作品ですでに証明してみせたように、<sup>(3)</sup> ゲーテ崇拜なる神話の森の中に捨てられてきた犠牲者、弱者の生涯を発掘・検証し、その再構築によって人間ゲーテの本当の姿、ありのままを提示しようとしている。DDR建国時わずか九歳、人生の最も多感な時期を社会主義建設期の東ドイツとともに歩んだ彼女の体験は、イデオロ

ギーと代用物ばかりの投与、つねに「歴史」として提供されるものになり、不信感、「歴史が中断し、停止している」という痛感につきる。それゆえに彼女は「歴史を再生することによって個人を取り戻そうとする」。そして、そのためには、「記録に即したもの」<sup>(アルヒ)</sup>「古文書館に保存されているもの」、つまり証拠となる資料・史料が、ドキュメントが、彼女にとって「確かな事実に立脚するための、最後の頼みの綱」となる。このことは、五四〇頁の大著『クリスティアーネ』に用いられた資料の大多数が、古文書館などに眠る手書の書類を発掘・解読、初公表したものである、ということにも示されている。この著作がただ単に文学的な読み物としての魅力のみならず、ゲーテ研究の上でも実証性という意味でいかに貢献度が大きいのか、そしてまた、それゆえにこそ、現在進めている邦訳作業の早期の完成・出版が望まれる理由なのである。

本稿の目的は、ジークリット・ダム『クリスティアーネ』の完訳を実現するための、そしてそれを待つてなされるクリスティアーネないしゲーテ論のための、基礎資料を整理することである。第一章では、最もヴァイマルらしい場所と言ってよいカンポサント（聖なる地、墓地）の歴史をたどってクリスティアーネに思いをはせる。第二章では、ダムの作品に依拠してクリスティアーネの受難史をたどり、当時のヴァイマル公国の政情を概観しつつ、ひとまずゲーテとの出会いまでのクリスティアーネを素描し、最後にクリスティアーネ・ウルピウス家系図を作成して掲載する。なお、そもそも、クリスティアーネの伝記自体、白紙に近いコルネリアほどではないにせよ、いわばピースの欠けたジグソーパズルである。したがって、本稿も、「ゲーテとの出会いまでのクリスティアーネ」と限定するにせよ、なお相当数のピースを欠く覚書にとどまるものであることを、あらかじめ断わっておく。

## 第一章 カンポサント・ヴァイマルス

### 一 ヤーコブ教会

ヤーコブ教会は、ヴァイマル市の北、市の中心部から少し離れた所にある小さな福音主義教会である。<sup>(5)</sup>細身の身廊はマンサード屋根に覆われ、塔が戴くバロック様式の円蓋、その尖頭は、晴れた日など、青い空にどこまでも無限に伸びていくようで、思いのほか高く感じられる。端から端まで歩いてほんのわずかでしかない境内。すべてが小さく、まるで簡素なたたずまい。だが、ここには、悠久の時間が流れている。

この教会でゲーテとクリスティアーネが結婚式を挙げたのは、一八〇六年十月十九日、戦乱の最中であつた。十四日、イエーナ、アウアーシュテットの会戦でプロイセン軍が敗北、潰走、フランス軍四万の兵がヴァイマルを占領、略奪、同日夜、ゲーテの家にも二名の狙撃兵が闖入、クリスティアーネのとなりの機転でゲーテは命拾いをしたといわれる。十五日夜、ナポレオンのヴァイマル入り、十六日、ひとり宮殿に踏みとどまった公妃ルイーゼの皇帝にたいする毅然とした釈明・嘆願によって、軍の大部分は数日して去ったとはいえ、戦禍と恐怖で市内はまだ騒然としていた。司式を務めたのは宮廷牧師ヴィルヘルム・クリストフ・ギュンター（二七五―一八二六）、結婚立会人は長男アウグストとその家庭教師リーマー、新郎ゲーテ五十七歳、新婦クリスティアーネ四十一歳、内縁関係になってからすでに十八年、翌年誕生のアウグストは十七歳になんなんとしていた。長男のあとに続いた四人の子供たち、一人は死産、あとの三人も、カロリーナ、カール、カティンカとわずかに名前を留め



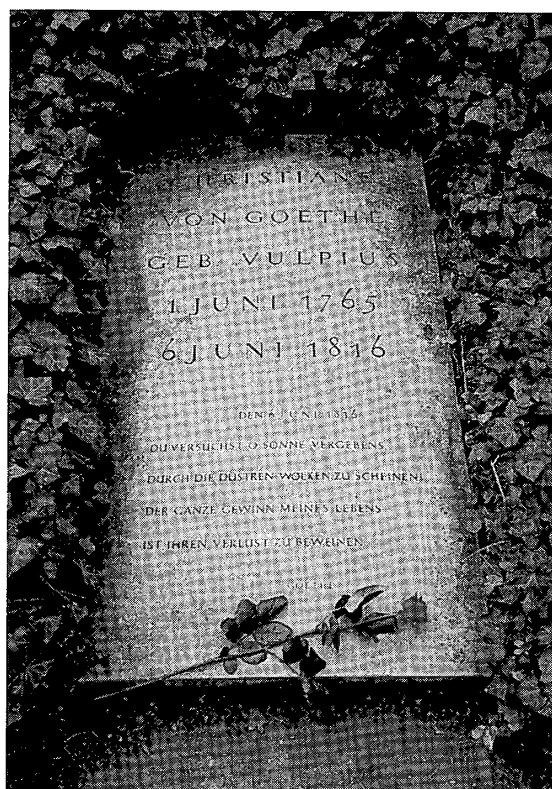


図2 クリスティアーネの墓碑

の集落のあった地区であり、あるいは当初から小教区教会であったのかもしれない。だが、ヤーコプ門、ヤーコプ市外区 (Jakobsvorstadt) などの呼称が残っているように、十三世紀半ばに始まる都市建造のさい、市の囲壁の外に置かれた(図3)。いわゆる墓地付き教会 (Friedhofskirche) であり、周囲に広がるヤーコプ教会墓地はヴァイマル最古の、唯一の墓地として使用されたあと、十三世紀半ば市教会 (現「市教会聖ペーター・パウル」、通称「ヘルダー教会」) の建立にともなって墓地は二箇所に分散するものの、一五三〇年以降は市教会墓地の閉鎖により再び唯一の墓地となり、それが、人口増加によって新墓地への移転を余儀なくされる一八一八年まで続く。この間ヤーコプ教会そのものは、宗教改革の進展にともない閉鎖されたあと穀物倉庫として利用されたりするが、およそ半世紀後の一五七九年に改修されて再献堂、さらに一七二二年から一三三年にかけて改築され、一七二八年には衛戍教会 (Garni-

sonkirche) となり、とくに一七七四年ヴァイマル・ヴィルヘルムスブルク城の焼失のあとは、宮廷教会も兼ねていた。

ゲートとクリスティアーネの挙式は、ゲートたつての希望により、祭壇の背後にある小さな聖具室で執り行なわれた。十月十七日、ゲートは宮廷牧師ギュンターに書簡でこう請願していたのである。「この数日、日夜考えた結果、私が以前から抱いてきた決心が成熟するに至りました。私は、私のためにいろいろと尽くしてくれ、この試練の時も私といっしょに切り抜けてくれた私の小さな女友だちを、完全に、かつ民法上、私の妻として承認しようと思います。つきましては、猊下、お教えを乞いたくお願い申し上げます。私たちふたりができるだけ早く、日曜日か、あるいはそれ以前に結婚式を挙げていただくためには、どうすればよろしいのでしょうか。また、そのためには、どのような手続がなされなければならないのでしょうか。猊下ご自身に司式の労をお取りいただけないものでしょうか。私としては、場所は市教会の聖具室を希望したいのです。ご返事は折り返し使いの者にお渡しください。取り急ぎお願い申し上げます。」ゲートは急いでいた。折しもカール・アウグスト公はプロイセン軍団長として出陣していて不在、彼がいたならば、挙式はおそらく阻止されていただろう。希望どおりの場所でなくともかまわない。ヤーコプ教会になったのは、市教会が宮廷牧師ギュンターの管轄外であったためである。文字どおり形式的な意味での挙式で、参列客が招かれたわけでも、まして挙式後披露宴の祝賀がなされたわけでもない。ほとんど、フラウエンブラインのゲート邸と教会の間を乗用馬車に乗って往復しただけ、と言ってもいいほどであった。数日後、この教会は衛戍病院のひとつとなり、イエーナ、アウアーシュテットの会戦による負傷兵が運び込まれ、身廊はさながら叫喚地獄と化するのである。<sup>(6)</sup>

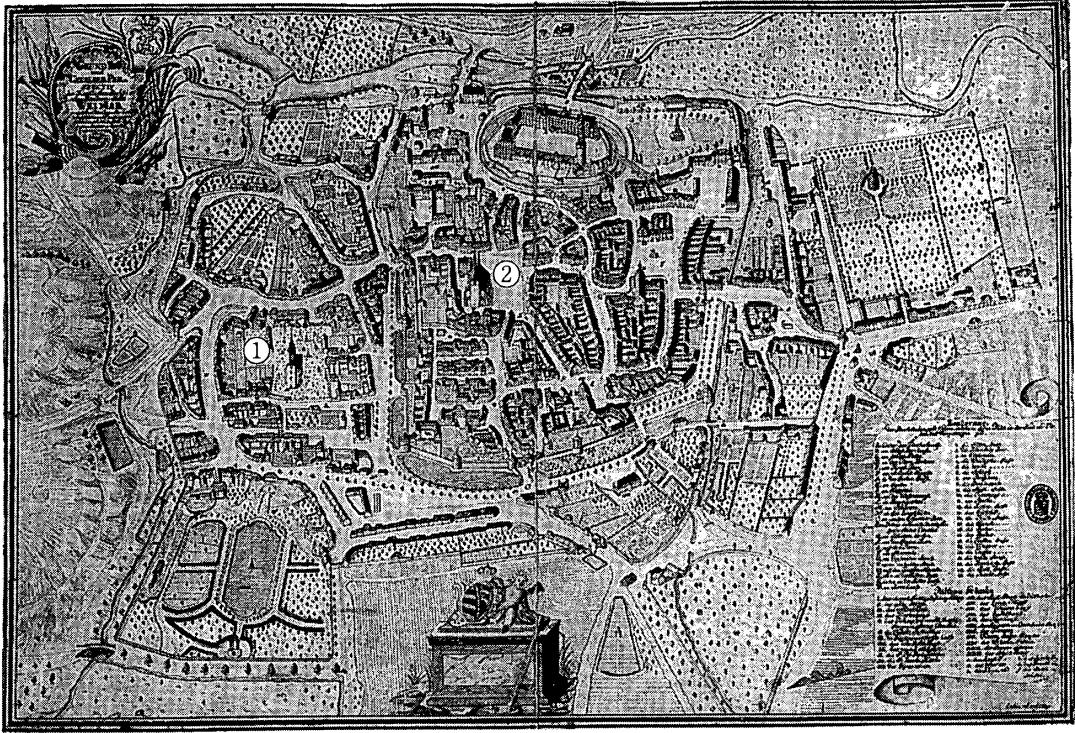


図3 1785年のヴァイマル。ルードルフ・ロッシウス作銅版画。

①ヤーコプ教会。②市教会。新墓地は市外右下に位置する。

ちなみに、挙式後ゲーテは、翌日と翌々日、友人に宛てて次のように書いている。「私たちは生きております！ 私たちの家は奇跡のように略奪と火災をまぬがれました…(略)…大きな災禍に見舞われたこの数日、晴天に恵まれて日の光がさんと降り注いでいたのは、なんとも不思議なことです。私と私の連れ合いは、悲しみにみちたこれらの日々を祝賀の儀式で晴れやかにしようと、三位一体の祝日後二十日の日曜日に当たる昨日、正式に神聖な結婚関係に入ることを決意しました。」(ニコラウス・マイヤー宛、十月二十日)「私が私の小さな女友だちと一昨日、正式に結婚したことは、あなたたちにも喜んでもらえることでしょう。私たちの結婚指輪に刻まれた日付は十月十四日です。」(クネーベル宛、十月二十一日)この日付がほかならぬイエーナ、アウアーシュテットにおけるプロイセン軍敗北の日であったことが、後々まで物議をかもすことになる。

ところで、一八一八年の新墓地開設後、ヤーコプ教会側の努力にもかかわらず、ヤーコプ教会墓地のほうは荒れ放題になる一方、街路新設工事のために墓地を囲む塀は取り壊され、墓丘は平らにされ、掘り出された遺骨は新墓地に移されていく。しかし、一八〇四年、ヴァイマル公子カール・フリードリヒ(一七八三―一八五三)に興入れた敬虔なロシア皇女マリア・パヴローヴナ(一七八六―一八五九)の慈善と資金援助によつてはじめて、市はヤーコプ教会墓地の保存に乗り出し、重要人物の墓がいまに伝えられるに至った。ルーカス・クラナハ(父)、ゲオルク・メルヒオール・クラウスやフェルディナント・ヤーゲマンなどの画家たち、指物師親方ヨハン・マルティン・ミーディング、童話作家ヨハン・カール・アウグスト・ムゼーウス、大臣クリスティアン・ゴットロープ・フォークトなどである。そしてクリスティアーネ・フォン・ゲー

テ。彼女の墓の場所は長い間不明となっていたのだが、一八八八年になって突きとめられ、その三年前に設立されたヴァイマル・ゲーテ協会の尽力により現在の記念碑が置かれるのである。「ヴァイマル近郊の村、エーリングスドルフ採石場から切り出された赤みをおびた砂岩が、板碑として選ばれる。地面に置かれた板碑には、〈夫から妻に〉宛てたゲーテの詩行四行が彫り込まれる。この墓碑の除幕式は一八八八年のことであつた。<sup>(7)</sup>」ちなみに、シラーもこの墓地の南側にある共同墓所カッセンゲヴェルベに埋葬されるが、一八二七年末、新墓地内に完成した大公家の霊廟に移される。やがて五年後の三二年三月二十二日、ゲーテ没、彼の棺もシラーの棺の右側に安置されるのである。

## 二 クリスティアーネの死

一八一六年六月六日、クリスティアーネ没。ゲーテの日記には「妻の臨終が近づく。肉体の最後の恐ろしい苦闘。正午ごろ逝く。私の内と外、空虚と死の静寂」と記されている。折しも、大公の次男ベルンハルト夫妻結婚祝賀パレードのために、町中が華やかな照明で飾られている。そんななか、「夜中の十二時、妻は納棺室に入れられた。私は終日ベッドに伏す」。八日早朝四時、ヤーコプ教会墓地に埋葬、同日市教会で追悼式が行なわれるのである。ヴァイマル市教会戸籍簿にはこう記録されている。「令室ヨハンナ・クリスティアーネ・ゾフィア・フォン・ゲーテ、旧姓ヴルピウス、ザクセン・ヴァイマル・アイゼナハ大公国正枢密顧問官ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ閣下令夫人、六月六日午前十一時半、脳出血により逝去。享年五十一歳五日。同月八日土曜日午前四時、身分にふさわしく死体仮安置所から運ばれ、聖楽隊と第一学年生徒全員の歌声の響くなか、埋葬される。追悼説教式は午後三時市教

会にて教区監督総長フォークト氏により執り行なわれる。」

五月九日、クリスティアーネは二回目の脳出血に襲われ、以来病床にあつたのだが、直接の死因は尿毒症であつたといわれる。腎機能不全からくる痙攣と激痛のために半狂乱となり、自分の舌を噛み裂くあまりの凄まじさに、付添いの女中たちも逃げ出すほどであつた。一八〇六年九月以来ヴァイマルに住んでいたヨハンナ・ショーペンハウアー（二七六―一八三八）は知人への手紙に、伝聞と思われるものの、こう記している。「ひとりぼっち、事務的な扱いをする看護婦たちのもとで、彼女は、ほとんど手厚い看病を受けることもなく死んでいきました。眼を閉じてくれる優しい手もなく、息子でさえ彼女のそばに行く勇氣がない、ゲーテも妻の最期を看取る気にはなれなかつたのです。」（エリーザ・フォン・デア・レッケ宛、一八一六年六月二十五日）実際、身内の誰がクリスティアーネの臨終を看取ったかは不明である。臨終の床にゲーテがいなかったことは確かで、そもそもほぼ一週間前の、彼女がベッドにかりうじて起き上がることができた五月三十日、この日が妻を見舞った最後であらうと推測されている。<sup>(8)</sup>もとより、ゲーテと死の関係、彼の深奥にひそむ複雑な心理は別に論じられなければならない重要な問題であるにしても、同じ屋根の下で暮しながら、死期の近づく妻を見舞わず、臨終にも立ち会わず、野辺の送りにとも埋葬にも、いや、追悼式にも参加しないというのは、いかなる理由によるのであろうか。当時ヴァイマルには、遺体には埋葬されるまで誰かが傍について共に過ごさなければならぬ、という規則があつた。このため、湯灌に呼ばれた老女が、六月六日の深夜から八日早朝までクリスティアーネの棺を守ったあと、ヤーコプ教会墓地まで十二人の男性に担がれた棺に付き添うのである。葬儀を取り仕切つたのは息子のアウグストであつた。ゲーテは六月五日の『日記』に

こう記している。「この混乱のただ中であって、息子が協力者、助言者、ただ一人の支えである。」

ヴァイマル市の南東にある新墓地は、一八一八年、ヤーコプ教会墓地の閉鎖にともない同年受難の日に開設されたあと、何度にもわたって拡張されていった。現在「先史Ⅱ原史時代博物館」が立つボーゼクシャーガルテン前の、同名の通りをはさんで南に広がる緩やかな斜面に展開し、いまでは美しい並木道のある一種の公園墓地の観を呈している。この墓地の最も古い区域が歴史的墓地 (Historischer Friedhof) と呼ばれ、パリのペール・ラシェーズ墓地さながら、ヴァイマル市の歴史上著名な人物が多数眠っている。先に述べたとおり、この墓地はひとつには人口の増加にたいする措置であったが、ひとつには墓地内に大公家の霊廟を造営し、市教会地下聖堂や宮廷礼拝堂に葬られていた公爵家の霊を一箇所に集めて祀りたいという大公カール・アウグストの願いと命令にも対応するものであった。建設監督官長クレメンス・ヴェンツェスラウス・クドレ (一七七五—一八四五) によって一八二六年に着工、二七年末に完成した。ギリシア・ドリス式の正方形の建物で、屋根は方形の円蓋を戴き、正面が柱廊<sup>ポルティコ</sup>玄関になっていて、ヴァイマルにおける代表的な新古典主義建築のひとつである。この霊廟に、大公は同年十二月十六日、シラーの遺骨をヤーコプ教会墓地から移して葬り、翌二八年七月二十八日には大公自身が、三〇年二月十八日には大公妃ルイーゼが、そして三二年三月二十二日にはゲーテが葬られるのである。ちなみに、大公家霊廟のすぐ後ろには、五九年に亡くなる大公妃マリア・パヴロフナの願いでロシア正教礼拝堂が建てられ、彼女は、祖国から運ばれた土の上に立つ小さな、まこと優美な礼拝堂の地下墓地に眠っている。

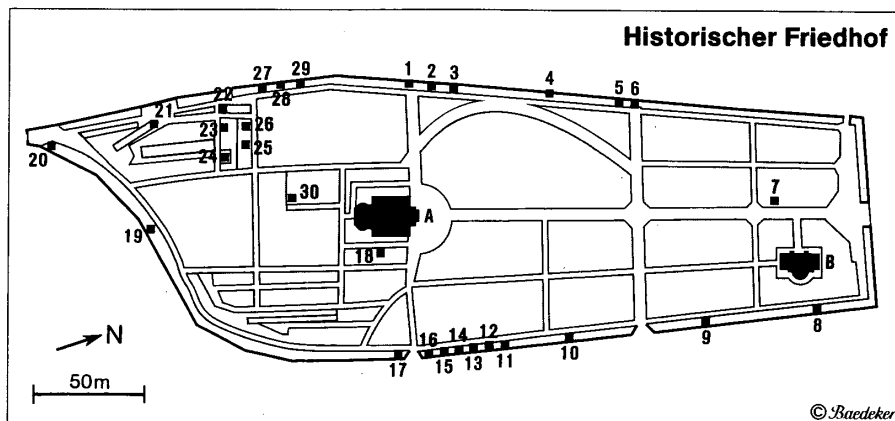
ところで、一八二七年一月十九日付ズルピーツ・ボワスレー宛書簡に

記されているように、シラーのそばに眠りたい、というのがゲーテの願いであった。「そんなわけで、私はこの世の最期の準備をするために、大公霊廟の並びの、私たちの新しい憩<sup>リユイト</sup>いの場所<sup>オルト</sup>、その上に置くふさわしい棺を設計してみました。この中に、いずれ、私の遺骸とシラーの遺骨をいっしょに納めてほしいのです。」しかし、死後も二人の詩人をそばにおきたいという大公の強い願望のためにゲーテの計画は頓挫、父の死後、君主となった大公カール・フリードリヒの指示によって、大公と三人で並んで眠ることになる。死後、ゲーテⅡシラーの名声のほうがいっそう光り輝き、それゆえ現在では「大公家霊廟」が「ゲーテⅡシラー霊廟」の名で呼ばれている。いずれにせよ、こうした経緯でクリスティーネとゲーテは、ヤーコプ教会墓地と歴史的墓地、市の北と南東に遠く離れて眠ることになったのである。それにしても、来世を信じていたはずのゲーテなのに、友人のほうを選んだ。彼にとって妻は、来世でもはやどうでもよい存在だったのであろうか。右に引用した、自分の最期の準備を告げる手紙にも、やがて再会できるはずのクリスティーネのことは一言も言及されていない。ヴェルターのプロットにたいするあの情熱的な表白は、ここではもはや、絵空事のように虚しく、白々しく響くばかりである。「ぼくたちはまたきつと会えます!どんな姿をしていたって、きつとわかります!」(第一部九月十日)

### 三 歴史的墓地と「ゲーテ家永遠の憩いの地」

ゲーテは長編『親和力』(二八〇九)でシャルロットにこう言わせている。「私たちは、個々の人格、生前のよしみや境遇、こうしたものを死んでからもあくまで強情をはって無理やり続けていこうとするよりも、せめて死んだあとは、やっと誰もが平等になれるのだという純粋な感情





A Fürstengruft  
(mit russisch-orthodoxer Kapelle)

B Gedächtnishalle

- 1 Grabstätte der Familie Goethe
- 2 Johannes Daniel Falk (Sozialpädagoge)
- 3 Carl Leberecht Schwabe (Bürgermeister von Weimar)
- 4 Clemens Wenzeslaus Coudray (Baumeister)
- 5 Franz Kirms (Hofkammerrat)
- 6 Charlotte von Stein
- 7 Christian August Vulpius (Schriftsteller)
- 8 Angelika Facius (Bildhauerin)
- 9 Karl Ludwig Oels (Schauspieler)
- 10 Johann Heinrich Meyer (Maler)
- 11 Grabstätte der Familie Genast (Schauspieler)
- 12 Johann Joseph Schmeller (Maler)
- 13 Wilhelm Ernst Christian Huschke (Arzt)
- 14 Friedrich Wilhelm Riemer (Literaturhistoriker)
- 15 Christine Kotzebue (Mutter August von Kotzebues)

- 16 Pius Alexander Wolff (Schauspieler)
- 17 Anna Dillon (Hofdame Maria Pawlownas)
- 18 Johann Peter Eckermann (Schriftsteller)
- 19 Grabstätte der Familie Wieland
- 20 Karl Eberwein (Stadtmusiker in Weimar)
- 21 Luise Seidler (Malerin)
- 22 Carl August Schwerdtgeburth (Kupferstecher)
- 23 Ludwig Friedrich von Froriep (Arzt)
- 24 Erbbegräbnis der Familie Herder-Stichling
- 25 Friedrich von Müller (Kanzler in Weimar)
- 26 Eleonore Maximiliane Ottilie Henckel von Donnersmarck (Oberhofmeisterin)
- 27 Johann Friedrich Röhr (Oberhofprediger)
- 28 Johann Nepomuk Hummel (Komponist)
- 29 Grabstätte der Familie Ridel
- 30 Euphrosyne-Denkmal

図4 歴史的墓地 (現在). 「ゲーテ家永遠の憩いの地」は1

をもつほうが、ずっと気が休まると私には思われます。」(第二部第一章) このきわめて理性的・合理的な考え方の、すくなくとも前半は、実際のゲーテがクリスティアーネの死にたいして取った態度でもあった。彼女の死の二日前、すなわち六月四日に突然高熱に襲われたゲーテは、たしかに五日、六日と床に伏していたが、七日にはもう起きて色彩論のための実験を行ない、八日には実験を継続するほか、友人たち宛に多数の手紙を書く。死んだ妻の部屋を片付けさせ、元どおり仕事を再開、二週間すこしたった六月二十四日、こう記している。「妻の死によって大きな喪失感を受けましたが、私にはまだ良いものや好ましいものがたくさん残されているのを数えあげて見るにつれて、人生がいっそう堪えうるものとなってきております。」(ヴィルヘルム・フォン・フンボルト宛) ゲーテ六十七歳、これが、この先、十七歳の少女への激しい愛情をはさんで、なお十六年生きることになる彼の処世の言葉であった。

ところで、シャルロットの言葉の後半部についてはどうであろうか。つまり、「せめて死んだあたとは、やっと誰もが平等になれるという純粋な感情……」のくだりである。二十三歳のとき、詩人・政治家ゲーテと知り合って内縁関係に入ったクリスティアーネは、庶民の出ゆえに、羨望半分、つねに白い眼で見られ、誹謗され続けてきた。一八〇六年正式に婚姻を結んで枢密顧問官令夫人となったあとも、閉鎖的なヴァイマルの社交界は、ゲーテに配慮する程度でしか彼女を受け入れない。身分違いということで彼女に下された裁きは、はるか後世にまで影響を及ぼすほど酷いものであった。死後の平等——それは、生前さんざんいじめられた挙げ句、病魔との壮絶な苦闘のはてに斃れたクリスティアーネの、いちばんの願いであったにちがいない。だが、この点に関しては、墓をめぐる次の経緯にも注目しておく必要がある。



大公家霊廟のあるあの歴史的墓地に入って右手、つまり西側の小道を石塀伝いに行くと、大理石像の少女が仰臥する、ひととき豪華なカララ大理石の墓に行き当たる。「ゲーテ家、永遠の憩いの地 (Ruhestätte der Familie Goethe)」である (図4)。ゲーテ家とは、どのゲーテ家を指しているのだろうか。故クリスティアーネの一周忌祭が行なわれたころ、つまり一八十七年六月十七日、ゲーテは長男アウグストを結婚させる。相手の女性は、マリア・パプロブナ妃の女官長ヘンケル伯爵夫人の孫娘に当たるオティーリエ・フォン・ポグヴィシユ (一七九六—一八七二) で、エキセントリックだが才気煥発、社交のセンスも文学的資質も拔群のものをもっていた。ゲーテは自分を敬慕してくれるこの娘が気に入る。オティーリエのほうもゲーテの名声と彼が身をおく華やかな世界に魅了され、彼を義父にもつ虚栄心と満足感に、もはや結婚を躊躇する必要がない。こうして若夫婦、アウグストとオティーリエの間には三人の子供が生まれる。長男ヴァルター (一八一八—一八八五)、次男ヴォルフガング (一八二〇—一八三三)、長女アルマ (一八二七—一八四四) である。しかし、ふたりの性格の違いゆえに夫婦間の溝は大きくなっていくばかり、幸福な結婚ではけっしてなかった。アウグストは、むろん自身の中にみずから破壊させる病巣を抱えていたとしても、結局は父の偉大さに押し潰された犠牲者であった。万事が親の七光り、地位も利益も父親の威光のお陰とあっては、自立のわずかな気概さえ奪われてしまう。妻は文学サロンを主宰し、文芸誌『カオス』を発刊したりして、尊敬と愛情を父に寄せこそすれ、夫である自分にはその欠片も示してくれない。「私は幼児みたいに歩行練習用の綱を付けられ／いままでみたいには操られるのは真っ平ご免だ／むしろ 奈落の淵に立って／すべての足枷から解放されたい。」この詩は妻の雑誌にただ一度寄稿したときのものだが、

アウグストの心情を如実に物語る。彼は結婚生活から、父の権威と庇護から、ヴァイマルから逃避するかのようにイタリアに旅立つ。だが、これとてしよせん父ゲーテの二番煎じであったかもしれない。一八三〇年十月二十六日夜、急性熱病のためローマで客死、ケステウスのピラミッドの近くにある新教徒の墓地に埋葬されるのである。

一方、夫と義父に死別したオティーリエは、マインツ、ライプツィヒ、ウィーン、イタリアなど各地で男性遍歴を重ね、とくにお気に入りのウィーンでは社交界で名を売り、生来の気前のよさと浪費癖から有り金を使い果たし、心身ともに燃え尽きて、一八六六年ヴァイマルに戻ってくる。彼女がゲーテ家の財産に手を付けることができないように、ゲーテがあらかじめ遺言で指定しておかなかったならば、彼女はすべてを蕩尽してしまったかもしれない。その舅ゲーテが大公家霊廟に眠っている。ゲーテによって代表されるあのヴァイマル黄金時代が、この墓地で永遠の時を刻んでいる。オティーリエは、自分が、文豪の孫たちが、自分の一家が、やがて休らうための奥津城を築かなければならない、と考えたのである。これが「ゲーテ家、永遠の憩いの地」であった。眠る少女の大理石像はアルマであり、母の奔放な生活に翻弄されて、芳紀十七歳にしてウィーンで亡くなった彼女の遺骨は、死後四十一年たってヴァイマルのこの墓へ移されたのである。アルマ、ヴァルター、ヴォルフガング、オティーリエ、彼女の母および一八〇九年以来家族の一員となってきた乳母ヴィルヘルミーネ・バッハシュタインの六名が眠る。三人の孫たちはいづれも未婚だったので、ゲーテの血統は死に絶える。オティーリエにとって、夫アウグストの遺骨の移送はもとより、ましてや姑クリスティアーネの遺骨のヤーコプ教会墓地からの移し変えなどは念頭になかったであろう。もはや、夫も義母も部外者であった。こうしてヴァイマ

ルを象徴するカンポサント（墓地）は完結する。「男」になれなかったもう一人のゲーテは遠い異国に眠り、母クリスティアーネ・フォン・ゲーテは、死んで再びクリスティアーネ・ウルピウスとなるのである。

## 第二章 ピースの欠けたジグソーパズル

### 一 クリスティアーネの受難史とジークリット・ダム

ジークリット・ダムは『クリスティアーネ』を次のように書き起こしている。

クリスティアーネ・ウルピウス、またはクリスティアーネ・フォン・ゲーテ。彼女は四半世紀以上もゲーテといっしょに暮した。内縁の妻として十八年、正妻として十年。ふたりの最初の出会いは一七八八年七月、クリスティアーネ二十三歳、ゲーテ三十八歳、出会ったとたん、もう恋人になっていた。ゲーテはクリスティアーネと人生を共にしながら、「わが人生のピラミッドを…（略）…可能なかぎり空高く聳え立たせよう」という「願望」に駆られて、比類ない作品を創造していった。

クリスティアーネとはどんな女性だったのか？

「美しい肉の塊 (un bel pezzo di carne)」 「徹底して無教養」とトーマス・マンは言い、「精神的水準、最低の女」とロマン・ロランは言う。ローベルト・ムシルの長編『特性のない男』の中では、「およそ品がないと言ってもいい名前」をもつ「女」、「老いていくオリュンポス神ゲーテの名だたるセックス・パートナー」と書かれる。本当にそうだったのだろうか？

同時代の口さがない人々は「淫らな愛人」、ゲーテの「囲い者」「めざ

つね」「いろ」「肉布団」と噂しあった。ヴィーラントにとってはゲーテの「女中」であり、事実、彼女十八歳時の職業欄には「ゲーテ政治家婦」と記載されている。シャルロット・フォン・シラーは「脳なしのデブ」、ベティーナ・フォン・アルニムは「気の触れたブラッドソーセージ」と罵る。カール・アウグスト公は記している。「あのウルピウスが何もかもだめにしてしまった。」これがゲーテの生涯において「クリスティアーネ」に付される注記となると、当事者ゲーテとて具合が悪く、困惑せざるをえない。

後代の本になると、パウル・ブルクの結婚小説『わがクリステル』のように、教養市民ふうの妙ないたわりが鼻につく。「ゲーテの愛読者なら、誰もがこの小説を読まなければならない。この作品は全ドイツ人に関わることなのである。」月並みな言葉、作り事、裏づけのない、ほとんど感傷的な美化か悪意にみちた非難。人種主義的な攻撃さえある。一九二〇年女性作家クララ・ホーファーはクリスティアーネを「類黒色人種型に分類した。「しぶといほど狡猾、反抗的な態度は粗野そのものの、心根がいやしい」と彼女の性質をあげつらい、こう述べるのである。「クリスティアーネをなんとかしてゲーテと対等の資格のある連れ合いと見なそうとする考えは、例えば、植民地の有色人種の女性を偉大な植民地統治者の伴侶にふさわしいと見なすべきだと主張するようなもの、無理無体、ばかげている。」

エッダ・フェーダーゼンの著作、ヴォルフガング・ウルピウスのクリスティアーネを扱った作品（一九四九刊、一九五七増補改訂）、エッカルト・クレスマンのクリスティアーネ論（一九九二）などは、いずれも根拠薄弱な事柄を叙述したものでしかない。ヴォルフガング・ウルピウスは「クリスティアーネの生涯など、その中にゲーテの生涯が含まれてい

なかったならば、わざわざ伝記に書くなどという気になる殊勝な作家など現れないだろう」と書いている。エッカルト・クレスマンにとっての関心事は、クリスティアーネなる「女性に近づいて、ゲーテがよりにもよってこの女性を伴侶とした事情を理解すること」であって、彼が強調するように「一七六五年から一八一六年に至る彼女の人生の歩みを再現すること」ではない。

ハンス・ゲルハルト・グレーフの大きな功績は、クリスティアーネとゲーテの間に交わされた手紙を編纂したことで、この書簡集は、一九一六年、クリスティアーネ没後百周年に当たる年の誕生日に出版された。伝えられるふたりの書簡は六〇一通、このうち二四七通がクリスティアーネからゲーテ宛、三五四通がゲーテからクリスティアーネ宛である。ゲーテはクリスティアーネを「性愛の対象」、「いとしい女」<sup>（ヒト）</sup>「大切なお手伝いさん」「長年のガールフレンド」、そして後に「妻」と呼んだ。ゲーテの母にとっては「神様がお造りになった素晴らしく純真な生き物」であった。

クリスティアーネの手紙を読んでみる。驚いたのは、ジュエチャーたっぷりで正確な語り口、細部描写を好んでいる点である。ひとりの女性として、自分の肉体、女性性やセックスについて語る言葉をもっており、当時としてはじつに異例、同様に日常生活を活写している点も異例といっている。二つの所帯を切り盛りし、所有地一つ、家庭菜園を二つ管理して、休む間もなく働く女性、その姿が私の眼前に歩み出してくる。彼女は、相続問題処理し、金銭取引を行なう。馬車を操り、単身で旅に出かけるときは二丁拳銃を携行する。よく食べ、よく飲み、とりわけシャパンには目がない。ダンスがとびきり上手で、四十五歳になってもなおダンスのレッスンを欠かさない。芝居好きだが、読書はそうでもなく、

本を手取るのは「お天気が悪いとき」とか「退屈でたまらないとき」に限られる。明るく、機知に富んでいて、つねに上機嫌である。

クリスティアーネの手紙。行間を読み、書きかけや暗示だけに留まっている箇所をよく考え、伝えられる事実をさまざま思い浮かべてみる。すると、手紙の中から、まったく別の女性の姿も歩み出してくる。肉体は見るからに五回の妊娠の痕をとどめる。四人の子供の相次ぐ死に苦悩し、生涯のあいだ高血圧症と腎臓疾患に苦しみ続けた女性でもあった。老いの不安。演じなければならぬ役割には台本もなく、そもそも彼女には不向きな舞台を努め続けることは、荷が勝ちすぎていた。際限のない家事、不平を鳴らし、不機嫌になる。変わりやすい気分、うつの兆候、傷つきやすい性格。そして、ひじょうに孤独であった。晩年の重い病、ひとりぼっちの死、早すぎる死であった。

クリスティアーネが残した自分についての証言と同時代の人々の彼女にたいする断罪・烙印の間には、このように架橋できない大きな矛盾が横たわっている。私は好奇心をそそられた。私にとって魅力的な仕事になるとすれば、彼女が歩んだ人生をたどること、それも彼女の側に立って物語ることであろう。しかしそれは、創作、つまり新たなクリスティアーネ像の創造という意味ではない。彼女の人生が事実としてどうであったのか、彼女にまつわる伝承のうちで、どれが確かなものなのか、この点に肉薄するという意味であって、そのための方法としては、調査、再現、古文書館における証拠資料の地道な探索以外にない。

一九九五年、ヴァイマル古典財団がヴルピウス家の遺品を購入するというニュースが報道された。ヴルピウス家最後の子孫、俳優であり音楽教師でもあったメルヒオル・ヴルピウスが一九九〇年、みずから人生に終止符を打ったのである。この遺品によってクリスティアーネのことが

いろいろ解明されるのではないか？ チューリンゲン国立古文書館には

クリスティアーネの父や兄に関する書類が保存されている。また、一九一六年、『クリスティアーネ書簡集』の編者グレーフがなした報告――

それは、ゲーテの死後、書斎には十六折判の『決定版全集』と『ゲーテⅡシラー往復書簡集』の間にはさまれて、黄色く変色した包紙に包まれたゴータ式書き込みカレンダーの三年分が置かれていて、これにはクリスティアーネの日記が記されているというものであったが、この報告をあとで再調査した人は誰もいない。はたしてこの『日記』はまだ存在するのか。支出簿、勘定書、領収書など、ゲーテⅡシラー文書館に保存されているゲーテ家の家政に関する手書の書類。それらの中に、クリスティアーネの日常生活、ゲーテと共に暮した二八年の歲月の手がかりが見つかからないものであろうか。

ここで、まず、ゲーテに出会う前のクリスティアーネ、彼女の生い立ち、青春時代や幼年時代、家柄、血筋、先祖をたどってみよう。(第一章)

作品の冒頭でダムはこのように執筆の動機を述べている。同時代ならびに後代のクリスティアーネにたいする酷評・断罪と彼女本人が残した自分についての証言、この両者の間にある矛盾が出発点となる。そして、何よりもまず、ゲーテと交わした書簡によって、彼女の人間性に触れ、たちまち従来の評価とまったく違った女性を発見するのである。カロラー・ゼドラチェクが指摘するように、ゲーテとの往復書簡および彼の母親アーヤの書簡など、当事者・関係者の生の証言が、クリスティアーネ再評価のきっかけになったことは間違いない。<sup>10)</sup>だが、ダムは手近にあるこうした資料だけでは満足しない。クリスティアーネの遺品、教会戸籍

簿や役所の記録を徹底的に調査して、驚くべき事実を突きとめ、彼女の実像を浮き彫りにしていく。生い立ち、幼年時代、そして十八世紀から十九世紀への世紀の転換期における彼女の人生、ゲーテとの同棲生活、結婚生活を描出していく。「事実」と「虚構」の狭間を耕す、というのが彼女の作家としての自己規定であり、『コルネリア・ゲーテ』で示した手法であったが、後者、すなわち空白を想像力で埋めるという作業はここではむしろ抑えられている。というのも、「いわば何も書いていない一枚の白紙」であったコルネリアの場合に比べると、はるかに資料が豊富なためである。彼女は、できる限り事実即して、詩人・政治家である稀有な男性に愛された女性の、稀有な人生について物語ろうとする。彼女の生涯を伝記として再構築することにより、ゲーテとの緊迫したパートナリシップ、彼の創作活動の主要な時期、すなわち一七八八年から一八一六年までの二八年におよぶ日々を描いていくのである。<sup>11)</sup>

とは言うものの、いざ再現となると、クリスティアーネの人生も、結局はピースのかなり足りないジグソーパズルでしかない。まず幼年時代・少女時代の資料が絶対的に欠けている。次いで、一七八八年ゲーテと同棲したあとの生活についても、九年後の一七九七年、ゲーテが自分たちふたりの関係をしるす書類を焼却してしまったために、大きな空白となっている。さらに、二八年にわたるふたりの共同生活について、ゲーテは彼女の死後もほとんど何も語っていない。しかし、ダムは、欠けたピースは欠けたままにして、可能なかぎり元の絵の復元に挑戦していくのであるが、以下において私は、ひとまずゲーテとの出会いまでのクリスティアーネを素描することにした。

## 二 クリスティアーネ——ゲートとの出会いまで

ヨハンナ・クリスティアーネ（正式にはクリスティアーナ）・ゾフィーアは、一七六五年六月一日、ヴァイマル市（当時人口約六〇〇〇人）ルター通り五番地（現キルムス・クラークハウスの裏手に当たる）で生まれた。父ヨハン・フリードリヒ・ヴルピウス（一七三二—一八〇六）は当時三十九歳、宮廷官房に勤める薄給の筆耕事務官、母クリスティアーネ・マルガレーテ（一七四二—一七八二）は、当時二十三歳、靴下製造工場を経営する裕福な商人ヨハン・フリードリヒ・リールの長女であった。ふたりは、父が宮廷官房に職を得た翌年の一七六〇年十一月十三日に結婚、六二年一月二十三日、長兄クリスティアン・アウグスト、六三年五月十七日、次兄フリードリヒ・カール・クリストフが生まれている。クリスティアーネは三番目の子となるが、次兄はすでに翌六四年五月十二日没、したがって両親、兄クリスティアン、クリスティアーネ、それに父方の未婚の叔母二人からなる六人家族、一家は父の年俸わずか五〇（六六年末以降は七五）ターラーで暮らしていた。S・ダムはヴァイマルの当時の物価について詳述しているが、月額換算で四ターラー四グロッシェン、これで家賃、燃料の薪、衣類、食料など一切を支払うとなると、ほとんど不可能、おそらく母の持参金を取り崩し、祖父リールから援助を受けて、どうにか暮らしていたと思われる。

父方の祖父ヨハン・フリードリヒ・ヴルピウス（一六九五—一七五二）はローテンシュタイン村の牧師の息子であったが、先祖代々の職業、牧師になるための神学の道を選ばず、イエーナ大学で法学を専攻、法律実務士の学位を取得、ヴァイマルに移住、宮廷弁護士となった。一七二三年一月十九日、牧師の娘ゾフィー・ドロテア・ヘッカー（？—一七五〇）と結婚、一七二五年十一月十二日、クリスティアーネの父が生

まれるのである。六子の二番目、ただ一人の男児であった彼は祖父の洗礼名をもらい、同じようにイエーナ大学で法学を専攻するのだが、実家の経済的困窮から二年で中退、一七四八年九月、ヴァイマルに戻ってくる。法律実務士の学位を有した祖父はすぐ弁護士に就けたのだが、学業半ば、法律候補生に終った父ヴルピウスは志願・請願を繰り返して、十年にもおよぶ悪戦苦闘のすえに、一七五九年十一月、筆耕事務官として宮廷官房に採用となったのであった。

ここで、クリスティアーネが生まれた頃のザクセン・ヴァイマル・アイゼナハ公国について見ておくと、アンナ・アマリーアの治下で、公国の財政は危機的な状況にあった。歴代の君主をすこし遡ってみると、専制政治によってヴァイマルの独立都市としての発展を妨げたといわれるヴィルヘルム・エルンスト公（一六六二—一七二八）、その甥に当たるエルンスト・アウグスト一世（一六八八—一七四八）。彼は、ヴァイマルをチューリンゲンのヴェルサイユにしようという妄想にとりつかれ、二〇もの城館や狩猟館や要塞の建築にも見られるとおり、暴君そのものの、彼のきわめて恣意的な浪費と軍事政策による支出によって、公国と市の財政は深刻な打撃を受けたといわれる。ついでその息子エルンスト・アウグスト二世コンスタンティン（一七三七—一七八八）が、摂政による統治を経て、一七五五年君主の地位に就任、翌五六年ヴラウンシュヴァイク＝ヴォルフエンビュッテル公の娘で、フリードリヒ大王の姪に当たるアンナ・アマリーア（一七三九—一八〇七）と結婚、二子もうけるものの、二十一歳の若さで病没する。二人の遺児、すなわちカール・アウグスト（一七五七—一八二八）とフリードリヒ・フェルディナント・コンスタンティン（一七五八—一八九三）をかかえて寡婦となったアンナ・アマリーアは、父ヴラウンシュヴァイク＝ヴォルフエンビュッテル公カール一世による

暫定統治のあと、一七五九年から七五年まで嗣子カール・アウグストを後見して統治する。十九歳のアンナ・アマリアが摂政の地位に就いたとき、公国は極度の財政難に喘いでいた。ひとつは七年戦争（二七五六―六三）による財政負担、もうひとつはエルンスト・アウグスト一世が残した三六〇、〇〇〇ターラーもの莫大な債務によるものであった。彼女は、就任早々、経費節減や新事業の抑制など、あらゆる面で徹底した切り詰めを行なって、何よりもまず財政再建に取り組まなければならなかったのである。<sup>13)</sup>

一七六五年六月一日、クリスティアーネ誕生。この年、ゲーテは十六歳、フランクフルト・アム・マインの両親のもとで豊かな少年時代を送り、九月、父の意向にしたがい法学を修めるためにライプツィヒに向かう。このとき、ヴァイマル市の北西、およそ七キロメートルの国道を通過している。しかし、父カスパルからの解放感にひたる彼にとって、新天地での自由な学生生活を予感しこそすれ、ヴァイマルもクリスティアーネもまだ完全に無縁の存在であった。ライプツィヒにおける自由奔放な生活、青春の情熱の爆発。だが、そのために彼はたちまち精神的にも肉体的にも危機に陥り、咯血して病床につく。六八年八月末、傷心をいだいて同じ道を通過、フランクフルトへと帰っていく。クリスティアーネは三歳であった。

さて、ヴルピウス家のその後をたどると、一七六七年三月六日、同居していた父方の叔母ヨハンナ・ゾフィーア没、また九月六日、妹ヨハンナ・ヘンリエッテ・ドロテーアが生まれるが、生後わずか四ヶ月で亡くなる。当時の流行病、天然痘によるものと推測される。六九年一月二十三日、弟ヨハン・ゴットフリープ・ハインリヒが生まれるが、この年、ヴルピウス家は深刻な転機を迎えることになる。すなわち、母方の祖父リ

ールが死去、それにともない母の弟ヨハン・アンドレアス・リールが靴下製造工場と家屋を相続、五月十三日、結婚、こうして、ヴルピウス家は頼みの綱とする経済的支援者を失うのである。父ブルピウスは少しでも給与の高い安定したポストを得るべく、アンナ・アマリア宛に請願を繰り返す。しかし、七〇年八月、請願却下の返事が届くのである。この年はドイツ全土が凶作に見舞われ、各地が飢饉に陥っていた。伝染病が広がり、ヴァイマルもペストの脅威にさらされていた。夏、母はまた妊娠、翌七一年二月二十七日、二人目の弟ヨハン・カール・エマヌエルを出産するのだが、ヨハンは三月三日没、衰弱した母も産褥から回復できず、後を追うかのように五月五日死去、享年二十九であった。十八歳で嫁いだ彼女は十一年間の結婚生活で六人を出産、しかもそのうち三人はすでに先立っていた。母を失ったとき、クリスティアーネはわずか六歳、兄クリスティアン九歳、弟ヨハン・ゴットフリープ、二歳であった。以後、同居していた父方の叔母ユリアーネ・アウグステ（二七三四―一八〇六）が母親代わりになって、子供たちの世話をするようになる。不作為・凶作が続いたこの時代、クリスティアーネの幼年時代は、思い出のことばすら残されていないことから、彼女にとってひじょうに辛いものだったと思われる。兄がテプファーマルクト（現ヘルダー広場）の北側にあったヴィルヘルム・エルンスト・ギムナジウムに通ったことは知られているが、クリスティアーネについては、はたしてどこかの学校に通ったのか、就学・通学の記録は皆無である。しかし、読み書きができたという事実から判断すると、彼女は公立学校ではなく、どこか私塾のようなどころで、あるいは自宅で教えられながら独学で学んだのかもしれない。

一七七四年五月六日夜半、ヴァイマル・ヴィルヘルムスブルク城が落

雷により出火、焼失する。宮廷は市内の各所に避難、仮住まいを余儀なくされるのである。この年の暮れ、十二月二十六日、父ヴルピウスが再婚、お相手はヨハンナ・クリスティーアーナ・ドロテア・ヴァイラント（二七四五―八三）、当時フォン・リュンカ男爵夫人に侍女として仕えていた二十九歳の女性であった。いまで言う「できちゃった婚」であり、むろん父ヴルピウスは婚前交渉の禁則を破った罪で教会に過料を支払うはめになるのだが、翌七五年二月二十八日には、もう異母妹エルネステイーネ・ゾフィーア・ルイーザが生まれる。

父の再婚当時、クリスティーアーネは九歳、ちなみにゲーテは二十五歳になっている。六十八年九月、傷心をいだいてライプツィヒからフランクフルトに戻って、すでに六年の歳月が過ぎていた。帰郷後、療養生活に入ったゲーテは、十二月七日、一時重態に陥ったりするが、当時敬虔主義者たちにもてはやされていた医師ヨハン・フリードリヒ・メッツ（二七二―八二）の秘薬によりからも命拾いをして回復、また、この頃、母方の親戚ズサンナ・カタリーナ・フォン・クレッテンベルク（二七三―七四）から敬虔主義の影響を受けている。翌年、病氣再発を繰り返しながらも次第に回復、翌七〇年四月、ライプツィヒで頓挫した法学博士の学位を取得するために、シュトラースブルク大学に入学する。七一年、二十二歳、法学博士の代わりに、その下の法学得業士<sup>リッセンツィアート</sup>の学位を取得、八月フランクフルトに帰り、弁護士開業の申請を行なって認可され、九月三日、弁護士およびフランクフルトの市民として宣誓する。翌七一年五月中旬、法律実習のためヴェツラルへ赴き、帝国高等法務院の実習生として登録、六月、ヨハン・クリスティアン・ケストナー（二七四―一八〇〇）とその婚約者シャルロッテ・ブフ（愛称ロッテ、一七五三―一八二八）と知り合い、彼女に情熱的な愛をそそぐが、九月、断念し

てフランクフルトに帰る。弁護士業を続けるかたわら、七三年六月、『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』を匿名出版、翌七四年九月、『若いヴェルター<sup>グロート</sup>の悩み』を出版、前年の『ゲッツ』に次ぐこの作品によって、一躍文壇の寵児として注目を浴び、その評判は遠いヴァイマルの宮廷でも話題になる。

周知のように、ブラウンシュヴァイク宮廷の啓蒙主義の空気の中で育ったアンナ・アマーリアは、自立心に富み、学問・芸術に関心の高い女性君主であった。彼女はしきたりを破って、息子の傳育官として、詩人・作家マルティン・ヴィーラント（二七三―一八一三）を招聘、その教育を受けたカール・アウグストは成人に近づき、母アンナ・アマーリアからの政權委譲を目前に控えていた。七四年十二月十一日、君主就任前の準備である見聞旅行にパリへ向かう途中、彼は弟コンスタンティン公子および随員の侍従クネーベルとともにゲーテを訪ね、十三日から十五日にかけて滞在先のマイニンツにゲーテを招待、ヴァイマルへと誘うのである。

一七七五年九月三日、カール・アウグスト公、十八歳でザクセン・ヴァイマル・アイゼナハ公国の君主に就任、二十二日ヘッセン・ダルムシュタット公女ルイーゼ（二七五七―一八三〇）との婚礼にカールスルーエに向かう途中、フランクフルトに立ち寄り、ゲーテをヴァイマルへ再度招待する。当時ゲーテは、父カスパルの意向にそうべく手を染めた弁護士業と文学にたいする抑え切れぬ欲求との矛盾、父親の呪縛からの解放・自立の問題、そして婚約者リーリー・シェーネマン（二七五八―一八一七）との婚約と婚約解消など、八方塞がりでお手上げの状態であった。真意のほどはわからないが、すべてを断ち切って新天地でやりなおそうと、公爵の招待に応ずる決心をしたものと思われる。だが、約束し



た公爵の使者が到着しない。三十日、しびれを切らした彼は南のイタリアを目ざして旅立つ。しかし、公爵の侍従フォン・カルプが発した急使がハイデルベルクで彼に追いつき、こうして彼は、不思議な運命の糸に操られるようにして、正反対の北へ、チューリンゲンへ、ヴァイマルへと向かうのである。それは、遠い記憶の奥底にひそむ父方の先祖の故郷——曾祖父ヨハン・クリスティアン・ゲートはチューリンゲンの小村アルテルンの蹄鉄工、同地で生まれた祖父フリードリヒ・ゲオルク・ゲートは仕立屋の親方、のちにフランクフルトの旅館の主人——つまり、南から北への、チューリンゲンへの帰還でもあった。

十一月七日、ゲートはヴァイマルに到着、財務長官カール・アレクサンダー・フォン・カルプ（一七二一九—一七九二）宅を当座の宿とする。すでに数日後、シャルロッテ・フォン・シュタイン夫人（一七四二—一八二七）を知る。クリスティアーネは十歳、家はルター通り五番地、現キルムスIIクラークウIIハウスの裏手にあり、家事手伝いの水汲みをする公衆井戸がカルプ家のすぐ近くにあったので、あるいは彼女はよそから来た二十六歳のゲートを見かけたことがあったかもしれない。とすれば、知らないうちに最初の出会いがなされていたことになる。<sup>(14)</sup>翌七六年三月、ゲートは、カルプ家から黄色い城館ゲルベシュロスの向かいの借家に引っ越す。四月、公爵からイルム河畔ガルテンハウスの庭の家を下賜され、二十六日ヴァイマルの市民権を取得、六月十二日には枢密評議会に議席と議決権を有する枢密外務参事官に任命される。年俸は一、二〇〇ターラー。こうして、早くもヴァイマルに取り込まれていくのである。「私は、いまや、宮廷内のもめごとや政治的な争いにすっかり巻き込まれてしまって、当地を去ることなどできそうにもありません。私の立場はじゅうぶん恵まれておりますし、それに、ザクセンIIヴァイマルIIアイゼナハ公国は、自分がはたして世

界的に通用する器であるかどうかを試すための、絶好の舞台なのです。」（ヨハン・ハインリヒ・メルク宛、一七七六年一月二十二日）

一方、クリスティアーネのほうは、この年の秋、四歳年下の弟ヨハン・ゴットフリープ・ハインリヒ没、享年七、異母妹エルネスティーネ、一歳半、兄は十四歳、ギムナジウムに通学、そして八一年秋、イエーナ大学入学のためにヴァイマルの両親の家を去っていく。クリスティアーネは十六歳、継母からエルネスティーネのほかに、さらに三人の弟妹が生まれている。ヨハン・ゼバスティアン（七七年生れ）、四歳、カール・ユリウス・ベルンハルト（七九年生れ）、二歳、ゾフィーア・フリーデリケ（八一年生れ）、生後一ヶ月であった。クリスティアーネの家事労働がいつそう増えていく。

出会いと別れ、それが人生であるが、十六歳のクリスティアーネにはまだ大きな出会いがないかわりに、実母、叔母、弟妹の死というかたちで別れが続いている。ヴァイマル入りしたゲートにとって、シャルロッテ・フォン・シュタイン夫人との出会いは、きわめて大きな意味をもつものであった。ヴァイマル到着後、数ヶ月たったころ、彼女がゲートに抱いていた反感が氷解、それに応じてゲートは彼女に若い情熱をぶつけていくのである。「さて、運命はわれらに何をしようとしているのか／さて、運命はわれらをなぜかくも固く結びつけるのか／ああ、そなたは前世では／わが姉妹か、わが妻であったのだ」（一七七六年四月十四日、シュタイン夫人宛の詩「なぜあなたはわれらに深き眼差しを与えたのか」）こうしてフォン・シュタイン夫人との恋愛関係が進展する一方で、彼は大きな別れにも見舞われる。最愛の妹コルネリアの死である。それは、彼にとって、二度目の、そして決定的な喪失であった。一七七三年十一月一日、コルネリアは彼の友人ゲオルク・シュロッサー（一七三九—一七九）と

結婚、そして七十七年六月八日、夫の任地エンメンディンゲンにて死去、十六日に訃報が届くのである。「妹死すの知らせ。暗い、心ちぎに乱れた一日。」(同日の『日記』<sup>15</sup>)

出会いと別れが心情面で大きな波乱を巻き起こしていく一方、仕事の面ではゲーテは出世街道を歩んでいく。一七七九年一月、カール・アウグスト公より、軍事委員会と道路建設委員会の長を委託される。そして九月五日、枢密顧問官に任命されるのである。「すばらしいことだと思います。まるで夢を見ているかのようです。私は三十歳にして、ドイツで市民が到達できる最高の地位に登りつめたのですから。」(フォン・シュタイン夫人宛、同年九月七日)「わが存在のピラミッドを可能なかぎり空高く聳え立たせようとするこの熱い思いは、他のすべてを圧倒して、ほとんど瞬時も忘れることをゆるさない。」(ラーヴァター宛、一七七九年九月八日)

そして三年後の一七八二年、ゲーテ三十三歳。数年だけの滞在予定だったヴァイマルが、すでに七年目になっている。四月十日、カール・アウグスト公の推挙により、皇帝ヨーゼフ二世から貴族に列せられ、六月二日、公爵から下賜されたフラウエンプラーンの家に移り、七日には財務長官ヨハン・アウグスト・アレクサンダー・カルプの解任にともない、その実質的な後任に就いて、職務に忙殺されてく。「人生の流れにどんどん流されて、周囲を観察する暇もないほどです。」(フィリップ・クリストフ・カイザー宛、一七八二年六月十四日)なお、この年の五月二十五日、父ヨハン・カスパル・ゲーテ没、享年七十二であった。

ゲーテが宮中に参内でき、カール・アウグスト公と同じ食卓につける身分になった一七八二年、クリスティーアーネ一家を待ち受けていたのはきわめて深刻な事態であった。しかし、それは、S・ダムが述べるよう

に、「もしかしたら、三十三歳のゲーテと十七歳のクリスティーアーネの人生が現実には接点をもつ最初のきっかけになったかもしれない。彼は枢密顧問官として、彼女は請願者として、である」<sup>16</sup>。すなわち、三月二十六日、父ヴルピウスは公務上の犯罪をおかしたかどで逮捕、拘留され、拘留は四週間におよんだ。この間、枢密評議会で何度も審理されるのだが、むろん、ゲーテもその一員として出席している。父ヴルピウス本人や兄クリスティアン・アウグストの行動は当然として、注目すべきは、クリスティーアーネのまこと素早い行動で、逮捕当日、すぐに宮廷官房に出向き、父の寛大な処置を願っていることである。四月三日、ヴルピウス本人の釈明書も参考に審理された結果、保釈となるが、五月三日、下された決定は、解雇通告であった。父ヴルピウスは、五月二十九日付で再度寛大な処置を願う出るが、宮廷官房からはなんの回答もない。そこでクリスティーアーネは、一家の窮状を訴えて、恩恵的給与の支給を請願、その結果、七月二十九日、情状酌量により解雇は取り消される。これにともない、恩恵的給与(年十二ライヒスターラー)および穀物十二シエツフェルが支給される。ただし支給期間は、新たなポストが見つかるまでの期間とする、というものであった。もとより、「新たなポストが見つかるまで」という付帯条件は体のいい慰めにすぎなかった。いかなる事情かわからないとはいえ、父親のために、家族のために、役所にたいては行動を起こしたのが、妻でも妹でもなく、娘のクリスティーアーネであったことは、特筆に値するといつてよい。しかし、彼女とゲーテの世界はなお無縁のままで触れ合うことはない。S・ダムは、徹底した調査にもかかわらず、こう確認せざるをえない。「ヨハン・フリードリヒ・ヴルピウスの職務犯罪の件で、三十三歳のゲーテと十七歳のクリスティーアーネのふたりの人生が、宮廷顧問官と請願者という形で、はじめ

て接点をもったと断言できる証拠は、いささかも存在しない。<sup>(17)</sup>

悲劇は悲劇をとまなうというが、父の件と併行して、悲しい出来事が相次ぐ。四月五日、異母弟カール・ユリウス・ベルンハルト没、五月四日、異母妹ゾフィーア・フリードリーケ没、八月十二日、異母弟ヨハン・ゼバスティアン・フリードリヒ没。明けて一七八三年二月十日、継母ヨハンナ・クリスティアーナ・ドロテア没、享年三十八であった。こうして、家に残った家族は、イエーナに住む兄を除くと、父ウルピウス、異母妹エルネスティーネ、叔母ユリアーネ・アウグステ、そしてクリスティアーネの四人となったのである。家賃滞納による家屋明渡しという深刻な事態が迫ってくる。

この絶望的な状況にあつて十七歳のクリスティアーネのつた行動は、まこと果敢であつた。ちやうど父が解雇通告を受け、妹ゾフィーアが亡くなったころ、彼女は仕事に就いて生活費を稼ぎだすのである。この頃、ヴァイマルきつての企業家フリードリヒ・ユステイン・ベルトウーフ（二七四七—一八二二）が造花工場を設立、妻カロリーネとその妹アウグステ・スレーフォークトが経営を始めたところであつた。造花といつても、絹、レース、ビロードなどの布を材料にして、花模様の帽子や衣裳の縁を飾る花であつた。それまでパリから高い金をかけて輸入していた流行の花飾りをヴァイマルで製造しようとしたのだが、単に製品の製造だけでなく、市民の娘にたいする造花のデザインや製法の教授、技術の取得をも兼ねた、規模も自宅の屋根裏部屋に設けられただけの、いまだ言えは一種の工房のような施設で、二十人ほどの娘が従事していた。クリスティアーネはこの工房で働き始めるのである。ただし、S・ダムの調査によれば、クリスティアーネの造花工房勤めはどんな伝記にも言及されている自明のような事柄ではあるが、これを裏づける書類は何一つ

発見されていない。ベルトウーフの帳簿類に記録もなく、クリスティアーネ自身の証言も、また後に生活を共にするゲーテの、これに関する言及も伝えられていない。ただ、ベルトウーフが父ウルピウスと知り合いであり、息子ヨハン・ゼバスティアン・フリードリヒの洗礼のさいに代父を引き受けていることから、窮状を知った彼が援助の手を差し伸べ、クリスティアーネを妻の工房に雇ったのかもしれない。<sup>(18)</sup>

同じ一七八三年、ゲーテとクリスティアーネは別々の隔絶した世界に身をおきながらも、微妙に触れ合うもうひとつの事件が起こっている。すなわち、十一月二十八日、子殺し犯アンナ・カタリーナ・ヘーンの斬首刑が執行されるのである。この処刑は、エルフルト門の外側にあつた刑場で執行されたが、市民が処刑の場に居合わせることは当時の決まりであつた。おそらくクリスティアーネも見物に集まった群衆の中にいたにちがいない。ゲーテは枢密顧問官としてこの死刑判決に加担したといわれる。とすれば、彼女は知らないうちに、ここでもゲーテの存在に出会っていることになる。<sup>(19)</sup>ゲーテがヘーンの判決にどのように関わつたのか、それは詳述しなければならぬ問題であるが、ここでは『ファウスト』の女主人公を思い出すだけにとどめよう。一七七二年一月十四日フランクフルトで、二十五歳のズザンナ・マルガレーテ・ブラントがやはり同じ子殺しの罪で斬首刑に処されている。ちやうどゲーテが弁護士の駆け出しであつた頃で、このときの衝撃がグレートヒェン悲劇のモチーフとなつたのである。わずか十年余りで、死刑の理不尽さを説いた詩人ゲーテが死刑を支持する役人に変身している。詩人タッソーと実務家アントーニオの抗争がゲーテの内部でいっそう先鋭化していく。すでにイタリアへの逃走の思いが疼きはじめる。

一七八四年十月二十九日、ふたりはヴァイマルの市民権を取得する。

つまり、クリスティアーネ、十九歳、造花工房勤務、クリスティアン・アウグスト、二十一歳、大学生である。市民権の取得には地所の所有が前提条件であるが、一七八二年に亡くなった祖母リールが孫たちに地所の相続分を遺してくれたこと、また八四年叔父リールが靴下製造業の倒産により同所の家屋を譲渡したことなどによって、条件が整ったのである。「当市市民の子供であるクリスティアン・アウグスト・ヴルピウス氏、法学生、およびヨハンナ・クリスティアーナ・ゾフィーア・ヴルピウスの両名は、本日、祖母の地所を相続したことに伴い、市民権を取得した。なお、相続遺産はわずかにつき、両名には税の半額が免除されるものとする<sup>(20)</sup>」父ヴルピウスの喜びがいかに大きかったか、想像に難くない。すでにこのころ健康をくずし、宮廷が支払う恩恵的給与をあくまでも「新しいポストが見つかるまでの」暫定給与として受領していたヴルピウスは、一七八六年三月一日の領収書の送付を最後に、同月二十九日、他界するのである。享年六十一であった。こうして、兄妹はいまや自立の道を歩まなければならない。クリスティアーネは、父に支給されていた恩給的給与をそのまま孤児年金として受給できるように手続を取ると同時に、造花工房の勤めを続けていったものと思われる。

一方、イエーナの大学を終えた兄クリスティアン・アウグストの関心は、父のように官吏になることではなかった。幼い頃から利発で機敏、才能に恵まれた彼は、ヴァイマルのギムナジウム時代から貧しい境遇を抜け出ようと勉学に励み、八一年同市を去ったあと、彼はカール・アウグスト公から奨学金を得て、イエーナ、エルランゲンで法学を専攻するかたわら、歴史、古銭学や紋章学、とりわけ文学に取り組んでいく。「彼の関心は文学活動に向けられていた。彼は文筆で食べていこうとしたのである。すでに学生時代にその大事業を開始、他の都市の出版社、

雑誌、図書館とコンタクトを取っている。一七八二年からライヒャルトの『小説図書館』に、一七八四年から雑誌『オルラ・ポトリダ』に寄稿していたことは裏づけられている。一七八四年、彼の三作品が出版され、そのひとつが『騎士パルメンドの冒険』第一部で、これは後に彼の出世作となるあの『リナルド・リナルディーニ』の原形であった。演劇にも手を染め、一七八三年韻文劇『オーベロンとティタニアあるいは再和解の記念祭』、一七八五年喜劇『詐欺また詐欺あるいは迅速な改心』を出す。彼は献辞で宮廷と宮廷劇場の注意を自分に向けようと試みる。韻文劇は公爵に捧げる。〈謹呈、クリスティアン・アウグスト・ヴルピウス。イエーナにて、一七八三年二月九日〉と彼は署名する。クルツやゾフィー・アッカーマンなどの宮廷劇場の俳優たちに詩を捧げる。一七八五年四月三十日の『ハムレット』の上演にさいしては、『オフエリア、アッカーマン嬢のために』を書いている。一年後、ゴータの演劇年鑑にこれらの詩が掲載される<sup>(21)</sup>。それらがゲーテの知るところとなり、こうしてゲーテはクリスティアン・アウグストとその家族の境遇を初めて知るようになる。つまり、兄は妹よりも前にゲーテと関係ができ、ゲーテからなんらかの経済的支援も受けるようになったと思われる。しかし、これも、やがてゲーテがイタリアへ旅立つことにより途絶えてしまう。妹二人と叔母の暮らしを支えるためにも、やむなく兄ヴルピウスはヴァイマルを離れ、エルランゲン、バイロイト、ニュルンベルクなどで家庭教師ないし私設秘書として働き始める。別れにさいして妹クリスティアーネに託したのが、援助と就職斡旋の嘆願書で、ゲーテがイタリア旅行から帰り次第、届けるようにと言いついたのである。

ゲーテがひそかに湯治滞在先のカールスバートを出発してイタリアに旅立ったのは、一七八六年九月三日、ヴァイマルに帰着したのは八八年六

月十八日のことであった。およそ一年九ヶ月におよぶ公務放棄、むろん、カール・アウグスト公には出発前の九月二日に長文の書簡で「期間未定の休暇」を願い出てはいたものの、今日では考えられないことである。公爵の理解と特別の計らいにより、枢密顧問官の地位を失うことも給料を減額されることもなかった。帰国の年、一七八八年三月十七日、彼はローマから書簡で再度の伺候をお願い出る。「私がいま申し上げられるのは、ただ次のことだけです。主よ、私はここにおります、汝の僕をいかにしようにもなしたまえ。どんな地位であれ、たとえどんな小職であれ、殿下が授けてくださるなら、ありがたくお受けいたします。出所進退、行住坐臥、なんなりと殿下の仰せのとおりにいたします。」私は、この一年半におよぶ孤独のなかで、本当の自分を発見しました。いかなる者としてかと申し上げますと、芸術家としてであります。」こうしてゲーテは官位称号および俸給は以前のまま、その上、職務は大幅に軽減され、イルメナウ鉱山の監督と学問芸術に関する諸官庁の監督以外の政務を免除されるのである。しかし、「第二の誕生日」だの「真の再生」だのとはしゃいだイタリアの日々は早や遠く、ゲーテを迎えたヴァイマルの現実、むろん彼自身のイタリア体験の圧倒的な影響もさることながら、つぎの言葉が告げるように、違和感そのものであった。「イタリア、この形態豊かな国から、私は形態の欠如したドイツへと帰ってきた。晴れ渡った空が薄暗い空に入れかわった。友人たちは、私を慰めたり再び自分たちのもとに引き寄せたりする代わりに、私を絶望的な気分させた。遠い、ほとんど知られていない対象に私が心を奪われ、失われたものについて苦しんだり嘆いたりしたことが、どうやら彼らの自尊心を傷つけたようだ。私の関心事のどれひとつにも興味を示してくれないのを寂しく思った。誰も私の言葉を理解してくれないのである。」<sup>(22)</sup> シュタイン夫

人でさえ、もはやゲーテのことを理解してくれなかった。次第に疎遠になっていく。こうした孤独な状況のなかで、彼はクリスティアーネに出会ったのである。七月十二日、彼女は、イルム河畔の公園を散歩中のゲーテに、兄から預かった就職斡旋の嘆願書（残存せず）を手渡す。ただし、S・ダムによれば、ふたりが初めて出会ったとされる七月十二日およびその場所イルム河畔の公園なし庭の家を特定する証拠はない。日時についてはもっと早い時期の可能性があるし、また場所についてもフラウエンプラインの家である可能性も否定できない。<sup>(23)</sup> いずれにせよ、その後、秘密裏に、事実上の結婚生活に入る。当時ニュルンベルクにいた兄への援助もすぐになされ、彼は一七九〇年にヴァイマルに戻り、やがて文筆活動で成功を収めていく。

兄の嘆願書は、じつに運命のごとき働きをなした。クリスティアーネ、二十三歳、ゲーテ、三十八歳、ふたりの人間が人生のさまざまな局面を経て、ようやく男女として出会ったのである。一目ぼれであった。これまで見てきたように、クリスティアーネの二十三年の人生について知られていることは、ほんのわずかである。いったい、どのような女性であったのであろうか。グルピウス家の近所に住んでいて、のちに歌手、女優として活躍するカロリーネ・ヤーゲマン（二七七―一八四八）は、クリスティアーネの少女時代を、こう回想している。「彼女は、可愛らしい、やさしい、勤勉な女の子でした。もぎたてのリンゴのような丸顔から、二つの燃えるような黒目が覗いていて、すこしまくれた唇はみずみずしい紅色、笑うたびに美しい白い歯が現れました。栗色の豊かな巻き毛が額や項にかかっていた。<sup>(24)</sup>」ヤーゲマンとクリスティアーネの年齢差から考えると、のちの伝聞による印象も混じっていると思われるが、この記述は、画家ヨハン・ハインリヒ・リップス（一七五八―一八一七）



図5 クリスティアーネ・ヴルピウス (1788～1789年頃) ゲーテによるスケッチ。S・ダムの記述は右の肖像。

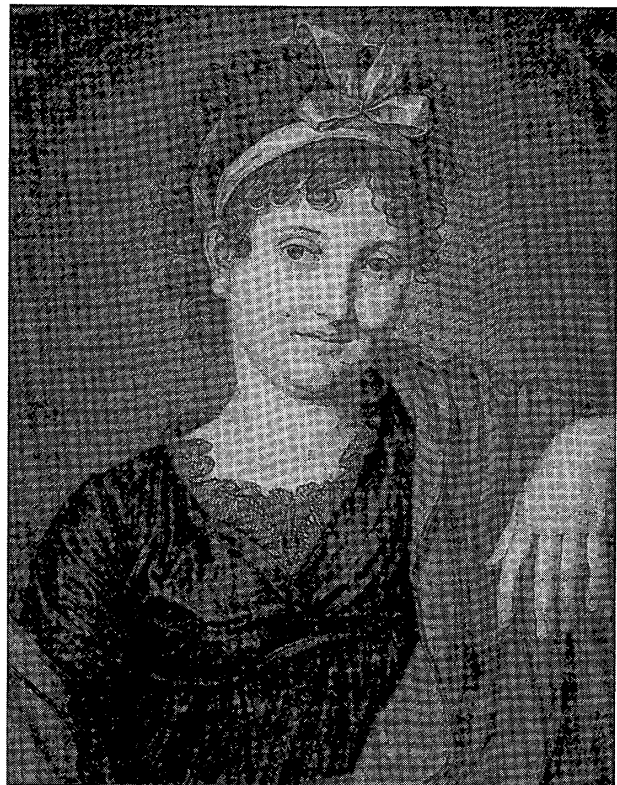
やフリードリヒ・ブーリ(一七八三—一八二三)によって伝えられる肖像画の印象とも大きく異なっている。ただ、ゲーテ自身も最初の数年に何度か恋人をスケッチしていて、S・ダムはヴァイマルに所蔵されるその原画の一枚について、次のように記している(図5)。「弱々しい女性でも、知的でも、けっして美人でもない。この二十三歳の女性の顔は、きつい感じで、ほとんど男性的といえるたくましい表情である。突き出た頬骨、高い大きな鼻、独特の深い切り込みのある唇、鼻と唇の間がすこし付きすぎている。女性らしさを呼び起こすのは、とりわけ豊かな髪だが、コルネリアのように高く結び上げた流行の髪形でもなく、フォン・シュタイン夫人のように技巧を凝らして編まれているわけでもない。調髪しないまま自然にカールして肩にかかっている。——この肖像画はローマ風に様式化されている、と学者は言う。だが、私にとってゲーテのスケッチに認めるのは、クリスティアーネそのものである。描かれた彼女から発するのはエネルギー、内面に満ちみちている大きな力である。疑って探るような目つきで、素描する恋人を見ている。時々、座っている時間が長すぎるというようにじりじりする様子を見せる。私の目に映るのは、生きる術を心得た若い女性、表情にしろされているのは人生そのものである。他人の意のままに誘惑されたり、媚薬の力に溺れたり、兄の意に添おうとして何かをするような女性ではない。十六歳年上の、人生経験豊かな、名のある男性の欲望に応え、自らの欲望に目覚める女性なのである。——この若い女性は、自分が入っていく危険をわかまえている。自覚と自己決定にもとづく行動。身振りによる言葉。気難しさはない。寡黙である。眼差しは決断力を告げている」<sup>(25)</sup>

S・ダムのこの記述は、これまで見てきたクリスティアーネ二十三年の人生を裏づける。貧困に潰されることもなく、父母(継母)、そして





図6 シャルロッテ・フォン・シュタイン夫人 (1780年頃)。作者不詳、銀尖筆によるスケッチ



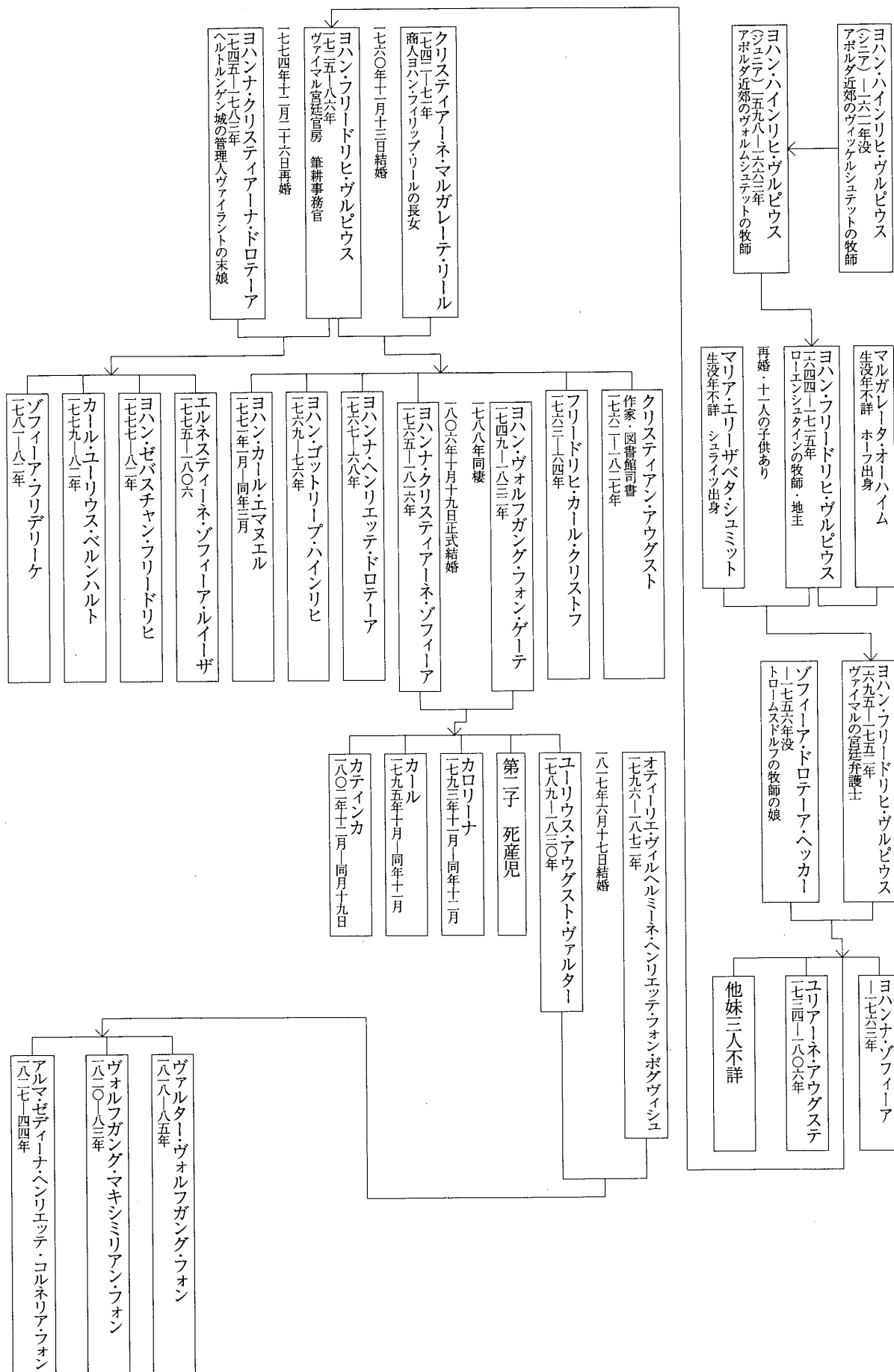
クリスティアーネ・ヴルピウス (1800年頃)。フリードリヒ・ブーリによるパステル画

多くの弟妹の死を看取ってきたけなげな魂。当時としては結婚適齢期を逸しているが、あくまでも素朴・無邪気である。すでに両親もなく、兄も遠くにいる彼女は自由であり、それゆえに自分で判断し行動する。おそらく、ゲーテが十六歳も年下のクリスティアーネに一目ぼれしたのは、彼女の飾らない自然な魅力そのものであったのだろう。「恋人よ、はや私に身をまかせたといって、悔やむことはない／きみが厚かましいとも卑しいとも、私は思っていないのだよ／アモルの放った矢の効目はさまざまというもの、ほんのかすり傷と思いきや／あとから毒がじわじわと蝕み、心は何年も病む／研ぎたての鏃をつけた矢こそ威力あり／髓に突き刺さり、一瞬にして全身の血を燃え立たせる／はるか古、男神女神が恋をした壮大な時代／まなざし会えばたちまち欲望が疼き、欲望はたちまち快楽となった／かつて、イーダ山の森でアンキセスを見初めたとき／恋の女神はいつまでも躊躇ったりしていただろうか」『ローマ悲歌』三番

こうして、事実上の結婚生活が始まる。慣習も教会も無視した大胆な振舞いであった。やがてクリスティアーネは妊娠、関係の露見、全社交界をあげての大騒ぎと非難、フォン・シュタイン夫人の激怒・落胆、正式の結婚によらない情交にたいする処罰の恐れ、自分の姿が子殺し女の運命と重なる。このような窮地を乗り越え、翌八九年十二月二十五日、引越し先のマリーエン通りの狩師館で長男ユーリウス・アウグスト・ヴァルターを出産するのである。

フォン・シュタイン夫人とクリスティアーネ(図6)。このふたりの女性にたいするゲーテの関係の間に、彼のイタリアにおける官能体験があったことは間違いない。このとき、ゲーテより七歳年上のフォン・シュタイン夫人は四十五歳、二十二歳で主馬頭を務める夫と結婚、七人の





子供を産むものの、五人を亡くしていた。人生に失望し、孤独で病気がちな彼女はゲーテと出会って初めて生命の花を開かせたのである。出会いからすでに十三年の歳月が流れている。ゲーテがそれまで最も信頼を寄せた高貴な女友だち、人妻であった。だが、ゲーテがいま現実として選んだのはクリスティアーネであり、彼女の中に自然を、生命を、官能の喜びを見いだしたのである。こうしてクリスティアーネとゲーテとの四半世紀におよぶ共同生活が始まる。この受難と闘いの人生については稿を改めなければならないが、以下、年譜の形でクリスティアーネの節目となる事項を掲げておきたい。なお、下段はゲーテの年齢である。

◇一七九一年（二十六歳）（四十二歳） 十月十四日、第二子を死産。

◇一七九三年（二十八歳）（四十四歳） 夏、フラウエンプラーンの邸宅へ引っ越す。十一月二十一日、長女カロリーネを出産するが、十二月三日没。

◇一七九五年（三十歳）（四十六歳） 十月三十日、第四子カールを出産するが、十一月十六日没。

◇一七九七年（三十二歳）（四十八歳） 七月二十四日、ゲーテは遺言を認め、妻クリスティアーネと息子アウグストの生活を保障する。

◇一八〇二年（三十七歳）（五十三歳） 五月、ゲーテ、長男アウグスト（十二歳）を認知する。十二月十六日、第五子カティンカを出産するが、同月十九日没。

◇一八〇六年（四十一歳）（五十七歳） 十月十九日、ゲーテとクリスティアーネ、ヴァイマル・ヤーコプ教会にて挙式。

◇一八一六年（五十一歳）（六十七歳）

六月六日 クリスティアーネ没、享年五十一。同月八日午前四時、ヤーコプ教会墓地に埋葬される。

### 三 クリスティアーネ・ヴルピウス家系図

以下、クリスティアーネを中心にした家系図を掲げておく（前頁参照）。

第二章二節においてヴルピウス家の先祖をたどったさい、煩雑になるのを避けるために祖父ヨハン・フリードリヒまでに留めておいたのだが、いまこうして家系図を前にすると一目瞭然、ヨハン・ハインリヒ（ジュニア）（一六六一—一六六三）、曾祖父ヨハン・フリードリヒ（一六四四—一七一五）まで、代々農村部の牧師の家系であったことがわかる。これに終止符を打つのがヴァイマルに出て宮廷弁護士となった祖父ヨハン・フリードリヒで、農村部から都市部への移住とともに職業も大きく変わり、父ヨハン・フリードリヒは官吏の道を歩むことになるのである。一方、ゲーテについて見ると、母方テクストル家のほうは、曾祖父ヨハン・ヴォルフガング（一六三七—一七〇二）がフランクフルトの法律顧問、祖父ヨハン・ヴォルフガング（一六九三—一七七二）がフランクフルト市長というように名門といつてよい家系であるが、父方ゲーテ家となると、曾祖父ヨハン・クリスティアンはチューリンゲン、アルテルンの蹄鉄工、祖父フリードリヒ・ゲオルク（一六五七—一七三〇）は仕立屋の親方、のちにフランクフルトの旅館の主人というように、およそ名門とは言えない家系である。父ヨハン・カスパル（一七二〇—一八二二）は大学を出て法学博士の学位をとり、帝室顧問官を名乗るものの、しょせん金で買った称号にすぎない。ゲーテがもって生れた才能と努力によって三十三歳にして貴族に列せられたにしても、家系をたどってみれば、ヴルピウス家より上だとはけっして言えない。ましてやゲーテとの結婚にさいしてクリスティアーネが身分違いを断罪されるいわれはないのである。もっとも、取り沙汰し、彼女を

蔑み、非難したのは宮廷社会の連中ではあったのだが。

クリスティアーネの先祖をたどって得たこの事実もさることながら、当時いかに幼児の生存率が低かったとはいえ、彼女の人生にともなう弟妹はもとより実子の相次ぐ死の多さにあらためて驚かされるであろう。次項「おわりに」におけるジークリット・ダムとの感慨を共有せずにはいられないのである。

## おわりに

ジークリット・ダムは『クリスティアーネとゲーテ』上梓後の一九九八年八月に十九日、ヴァイマルに招かれたさい、地元紙『東チューリンゲン新聞』(OTZ)のインタビューにたいして、次のように答えている。

：(この作品における)私の試みは、いわば絵画の修復技術者に徹することでした。古い壁画を前にして、補筆した所、埃や真正でない被膜を除去してゆきます。その下に私が見いだすのはただの破損面であるかもしれないませんが、その場合、私もその箇所はそのままにしておきます。ピースの三分の一が失われたジグソーパズルであったとしても、私はそれを勝手に補うことはしませんでした。「そうであったかもしれない」という推測を交えた『レンツ』や『コルネリア』の場合とは逆に、私はここでは完全に証拠となる資料に信頼をおいたのです。それでも十分スリルがありました。五〇〇頁以上の本書に掲載されている書類の多数は手書の書類にもとづいて初めて公表されたものなのです。このようなことはゲーテの研究書においても普通のことでありません、じつにセンセーショナルなことです。私はまず調査に二年費やしたのですが、語り

手として私がなしたのは、記録として残っている資料を一編の物語になるように自家薬籠中のものとした上で、言語化することでした。作品として完成するのに、私はさらに二年の歳月を費やしたのです。

インタビューアーが問う。「いま、仮にクリスティアーネ本人と直接話すことができたとしたら、ぜひとも彼女に尋ねてみたいのはどんなことですか。」「：残されている証言によれば、ゲーテにとって子供たちの誕生は明らかに大した問題ではなかったということになるようです。子供たちが次々に亡くなっても、それにはたいする悲しみはついに一度も言葉で表明されませんでした。証言どおりだったとすれば、クリスティアーネがそういう夫を、いったいどのように感じていたのか、質問してみたいものです。作品を創造することは単にゲーテの名誉欲であったばかりではありません。彼には社会的な名誉欲もありました。宮廷に出仕するさい、あるいは勲章を身に付けるときにみせる夫の名誉欲を、妻クリスティアーネが明るく、微笑みながら、冷静な気持ちで眺めていらなくなるのが時としてなかったものかどうか、私は彼女に質問してみたものです。」

「注(2)」にも記したが、二〇〇〇年、中部ドイツ放送局から、『クリスティアーネ』の朗読カセットが発売された。カセットテープ、全四巻、朗読時間三六〇分、朗読はエーファ・マテスである。ジャケットにはこう記されている。「感情移入した彼女のたくみな朗読によって、長いあいだ誤解され続けてきた女性クリスティアーネは生の声を取り戻している。」いま、私の書齋にマテスの朗読が響いている。クリスティアーネがすこし近づいてきてくれたような気がする。

注

- (1) 西山「森の中のタイムトンネルゲーテ生誕二百五十周年に寄せて」日本女子大学『文学部紀要』第四九号、二〇〇〇年、五五―八四頁。西山「ゲーテとの新たな出会いにむけて」『世界文学』第九一号、二〇〇〇年、五五―六三頁。西山「シックリット・ダム『コルネリア・ゲーテ』と日本の読者——コルネリア・ゲーテ生誕二百五十周年に寄せて」(独文) 日本女子大学『文学部紀要』第五一号、二〇〇一年、六九―八四頁。
  - (2) Damm, Sigrid: *Christiane und Goethe. Eine Recherche*. Frankfurt a. M. und Leipzig 1998. なお、二〇〇〇年、この作品の朗読カセット (Gelesen von Eva Mattes) が中部ドイツ放送局 (Mitteldeutscher Rundfunk) により発売された。
  - (3) Damm, Sigrid: *Vögel, die verkünden Land. Das Leben des Jakob Michael Reinhold Lenz. Biographie*. Berlin und Weimar 1985. *Cornelia Goethe. Biographie*. Berlin und Weimar 1987 (邦訳: 西山『奪われた才能——コルネリア・ゲーテ』郁文堂、一九九九年)。
  - (4) Damm, Sigrid: Der Kopiestift hinter dem Ohr des Soldaten. In: Atemzüge. Essays. Insel taschenbuch 2000.
  - (5) 本稿の、とくにヴァイマル関係の記述にあたっては、ダムの著作のほかに参考にした主要文献は次のとおりである。Gitta Günther, Wolfram Hutschke und Walter Steiner (Hrsg.): *Weimar. Lexikon zur Stadtgeschichte*. Weimar 1998. Friederike Schmidt-Möbus und Frank Möbus: *Kleine Kulturgeschichte Weimars*. Weimar und Wien 1998. Benedikt Jęging, Bernd Lutz und Inge Wild (Hrsg.): *Metzler Goethe Lexikon*. Stuttgart und Weimar 1999. Gero von Wilpert: *Goethe-Lexikon*. Stuttgart 1998. Efi Biedrzyński: *Goethes Weimar*. Zürich 1994. Hrsg. Von Bernd Witte, Theo Buck, Hans-Dietrich Dahnke, Regine Otto und Peter Schmidt: *Goethe Handbuch*, Bd. 4/1, Stuttgart und Weimar 1998.
- またゲーテの年譜関係の記述は、潮出版社版『ゲーテ全集』第一五巻 (四四九―五三〇頁) を参考ないし使用させていただいた。
- (9) Vgl. Friederike Schmidt-Möbus und Frank Möbus: *ibid.* S. 167.
  - (7) Damm, Sigrid: *ibid.* S. 512.
  - (8) Damm, Sigrid: *ibid.* S. 498.
  - (9) Unsel, Siegfried: *Goethe und seine Verleger*. Frankfurt am Main und Leipzig 1993, S. 568.
  - (10) Sedlacek, Calora: Christiane von Goethe (1765-1816). In: *Goethe Handbuch*, Bd. 1/4, Hrsg. von Bernd Witte, Theo Buck, Hans-Dietrich Dahnke, Regina Otto und Peter Schmidt, Stuttgart und Weimar 1998.
  - (11) Vgl. Damm, Sigrid: *Christiane und Goethe. Eine Recherche. Leseprobe*. Frankfurt am Main 1998.
  - (12) Damm, Sigrid: *ibid.* S. 33f.
  - (13) Vgl. Salentin, Ursula: *Anna Amalia. Wegbereiterin der Weimarer Klassik*. Köln, Weimar und Wien 1996, S. 40.
  - (14) Damm, Sigrid: *ibid.* S. 53.
  - (15) ヤーチ民衆の関連については次を参照。Damm, Sigrid: *Cornelia Goethe*.
  - (16) Damm, Sigrid: *ibid.* S. 64.
  - (17) Damm, Sigrid: *ibid.* S. 72.
  - (18) Damm, Sigrid: *ibid.* S. 73f.
  - (19) Damm, Sigrid: *ibid.* S. 81f.
  - (20) Damm, Sigrid: *ibid.* S. 100.
  - (21) Damm, Sigrid: *ibid.* S. 101f.
  - (22) In "Schicksal der Handschrift" zur *Metamorphose der Pflanzen*.
  - (23) Damm, Sigrid: *ibid.* S. 114.
  - (24) Vgl. *Goethe Handbuch* 4/1, S. 394
  - (25) Damm, Sigrid: *ibid.* S. 115.